

## 『音楽的な感受を基盤とした思考・判断・表現する力をはぐくむ』

～音楽を形づくっている要素をもとに、表現領域と鑑賞領域との関連を図った題材構成を通して～

成田 幸代

### 1 テーマ設定の理由

中央教育審議会における「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(答申)の中では、「音楽に関する用語や記号を音楽活動と関連付けながら理解することなど表現と鑑賞の活動の支えとなる指導内容を〔共通事項〕として示し，音や音楽を知覚し，そのよさや特質を感じ取り，思考・判断する力の育成を一層重視する。」ことが挙げられている。また，PISA調査の中にもみられるように，我が国の子どもたちには読解力が不足している点が浮き彫りになっている。

これらを受けて，音楽科においては，音楽を形づくっている要素を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を受容し，それをもとに，生徒一人一人が試行錯誤して表現したり，主体的に味わって鑑賞したりする学習の充実が求められている。

そこで，個別学習や少人数によるグループ活動などを通して，生徒自らが思考・判断し，表現を工夫したり，聴いた音楽のよさや美しさなどを相手に伝えたりすることのできるような学習を展開する。このことにより，音楽的な感受を基盤として，思考・判断・表現する一連の過程を重視した学習を推進するための指導及び評価の在り方を研究することが本研究のねらいである。

### 2 「音楽的な感受を基盤とした思考・判断・表現する力」の育成

本研究では，「音楽を形づくっている要素を知覚・感受すること」を学習の中核とし，それを生かした表現や鑑賞の学習を展開する。その際，個人または，小グループによる活動を重視する。表現の学習では，自分なりの表現の在り方をイメージし，試行錯誤しながら音楽を工夫して表現する。また，鑑賞の学習では，自分なりの音楽のとらえ方やイメージ等を大切にしながら音楽を聴いたり，仲間とともに音楽に対する意見交換を行う。こうした学習過程により，「音楽を思考・判断・表現する力」が育つものにとらえ，感受の力を高め，『表現領域と鑑賞領域の関連を図った授業づくり』を展開する。そこで身に付けた力をもとに，各題材の中で，表現活動や鑑賞活動において，各生徒が音楽に対する自分の思いやイメージなどを音楽用語などの音楽に関する言葉を用いて表現したり，話し合いができるような活動を展開する。

### 3 音楽を形づくっている要素の働きと曲想との関連に気付く（認識する）ことの重要性

我々教師が，音楽を志す動機となった要因には様々あるであろう。義務教育時に受けた授業の印象がきっかけとなってもいる。また，幼少よりお稽古ごととして，ピアノなどの演奏活動，そして小中学生時に吹奏楽や合唱等の活動などにかかわった経験にもよるであろう。いずれにしろ，音楽的環境に身を寄せ，ある一定時期において継続的に取り組むことにより，音楽のすばらしさを感じた経験を誰もがもっている。我々が，音楽に感動し，様々な情動が喚起されるのは，こうしたバックボーンの中で“音楽を形づくっている要素の働きと曲想との関連に気付く（認識する）力が身に付いているからである。この“音楽を形づくっている要素の働きと曲想との関連に気付く（認識する）力”が身に付いていることによって「音楽のすばらしさ」を感じるのである。

「音楽のすばらしさを感じる」とは，音楽をより深くとらえることができることだといえる。例えば，和声的な進行において半終止のあとには，終止感を感じ取れる。また旋律においてもその基調とする終止音への帰属を予感することができる。また，楽曲の全体構想を聴きながら内声や副旋律の存在，そして低音の動きや音色，テンポの変化など，楽曲の中にちりばめられた様々な音楽的要素を感じ取りながら音楽を感じ取り，また表現している。このように「音楽のすばらしさを感じる」ためには“音楽を形づくっている要素の働きと曲想との関連に気付く（認識する）力”が不可欠な要素となる。

### 4 全体研究との関わり

平成17年度から平成19年度までの全体研究では，生徒一人一人が，本質的で重要な事柄をきちんと習得することにより，他の事柄においても様々な関連を意識し，自らが試行錯誤しながら「かかわり」を見いだすことをね

らいとして研究を推進してきた。その研究の成果と課題をふまえ、平成20年度から生徒一人一人が見いだした「かかわり」を、生徒自身が振り返り、整理し、発信することができることをねらいとしている。

音楽科では、「かかわり」とは、音楽を聴く活動を通して、音楽を形づくっている要素を感じ取り、そこで感じ取ったことを表現活動及び鑑賞活動に生かすことだととらえている。一つの楽曲は様々な音楽的要素がかかわり合って構成されている。それがわかることによって音楽の表現や鑑賞の意欲が高まると考える。この考えをふまえて音楽科では平成17年度から、生徒が感受を基盤として「かかわり」を意識し、表現領域と鑑賞領域の関連した題材構成に取り組んできている。その結果、生徒自身が音楽を聴く活動を通して音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じたことをもとにして、表現活動及び鑑賞活動では本当の音楽の楽しさを実感することができるようになったと思われる。これまでの一斉授業にありがちな「このように表現しなさい、このような練習をしなさい、この音楽はこういう音楽です」などといながら音楽の学習を行うことが本当の音楽の楽しさの実感につながるのかは疑問であるとともに、現在の生徒の状況からも、指導することと学びとらせることの住み分けを見極めることの大切さを実感している。このように中学校3年間を見通して1時間1時間をどのように仕組むかについて、これからもきちんと考えていく必要がある。

また、生徒が「かかわり」を見いだす場面での評価の在り方や生徒自身が見いだした「かかわり」を表現活動や鑑賞活動の中で意識しながら取り組むことができるようにさらに研究を進めていきたい。

## 5 評価規準の作成と評価方法の設定について

平成14年2月の国立教育政策研究所教育課程研究センターから公表された「評価規準、評価方法の工夫改善のための参考資料」を参考に年間指導計画を基づき、題材の評価規準を作成する。さらに題材の中での具体的な学習活動についての評価規準（具体の評価規準）を作成し、生徒の『音楽を思考・判断・表現する力』の実現状況を見取る。評価の4観点（平成13年4月 文部科学省193号通知）については、下に示した通りである。

ア 音楽への関心・意欲・態度	【関心・意欲・態度】
イ 音楽的な感受や表現の工夫	【思考・判断】
ウ 表現の技能	【技能・表現】
エ 鑑賞の能力	【知識・理解】

また、評価方法については、生徒に音楽を形づくっている要素を感受させるために、一つの要素だけに注目させ比較鑑賞を行ったり、コンピュータで要素を強調した楽曲を聴取させるなどしたりして「見えにくい学力」と言われる感受した様子を観察（生徒の発言を含む）や記述、発表などから見取りたい。

## 6 昨年度の成果と課題

本研究では、「音楽を形づくっている要素を知覚・感受すること」を学習の中核とし、それを生かした表現や鑑賞の学習を展開した。その際、個人または小グループによる活動を大切にするとともに、近隣の中学校の音楽教師の協力を得て、要素の働き（速度や強弱の変化など）が聴き取りやすい範唱教材を作成し活用した。これらは、指導のねらいを焦点化し、そのねらいや生徒の実態に即した指導を行う上で有効であった。次に生徒たちが音楽を形づくっている要素を知覚しそれらの働きを感じたかどうかの実現状況について、学習活動の観察及び学習シートへの記入内容から見取った。この評価方法は効果的であったが、音楽や音楽のイメージに関する語彙が少ないことが課題となった。そして、知覚・感受したことをもとにし、自分たちのイメージに合った曲想表現の工夫を行った。

さらに、表現の工夫を行った後に鑑賞活動を仕組んだ。生徒たちは、表現活動で身に付けた力をもとに、より味わって聴くことができおり、生徒たちの変容が見取れるような題材構成を行うことができたといえる。しかし、実際の表現活動においては、表現の工夫に対する意欲はあるものの、自らの力では行うことが難しい状況が、一部の生徒にみられた。新学習指導要領の〔共通事項〕に示された活動を重視し、曲想を感じ取ることを生徒一人一人が実現していけるような授業の工夫や表現活動でのスモールステップによる学習の手立てなどをさらに整備することが、課題としてあげられる。

## 7 今年度の具体的な研究内容

### (1) 研究対象：第2学年

- ・ 楽曲の聴き取りを行い、音楽を形づくっている要素と曲想とのかかわりを認識できる力を身に付けさせるために適切な教材の開発を行う。
- ・ 楽器の特徴を理解し、基礎的な奏法を生かし、思いや意図をもって表現を工夫したり、鑑賞したりする題材構成について研究する。
- ・ リズムやコードネーム等を理解し、楽譜に関するリテラシーを身に付けさせるための学習の手立てについて研究する。

### (2) 成果の検証・方法等

検証にあたっては、授業における生徒たちの話し合いの様子や学習シート等の記述にみられる音楽的語彙などについて抽出し、個々の生徒がどのような変容があったかを、題材ごとに評価を詳細に行えるようにする。また、関心・意欲・態度に関する側面、そして音楽を形づくっている要素の知覚・感受に関する側面、そして技能を含む音楽の表現や鑑賞の能力に関する側面の3つの関連性を見取っていく中で、音楽科としてはぐくむ学力を明らかにした題材の構造化を研究する。

### (3) 期待される成果

- ・ 各題材の学習を通して、音楽を形づくっている要素について知覚・感受したことをもとにして、自分の思いやイメージとかかわらせて工夫して表現したり、味わって聴いたりする力を身に付けることができると考える。
- ・ 小アンサンブルなど少数グループ学習により、抵抗感の少ない中で、個人で表現できる環境を整えることによって、個人及び全体の音楽を質的に高めることができると考える。
- ・ 楽譜のリテラシーを身に付けることにより、さらに音楽の構造について理解を深めることができると考える。

## 8 今年度の成果と課題

今年度は、2学年を研究対象とし、新学習指導要領に沿って、感受を基盤とし、思考・判断・表現の力を育てるための授業実践を行った。7の(1)研究の視点に沿って成果と課題について述べたい。

- ・ 楽曲の聴き取りを行い、音楽を形づくっている要素と曲想とのかかわりを認識できる力を身に付けさせるために適切な教材の開発を行う。

楽曲の聴き取りにおいて既成の教材では生徒が音楽を形づくっている要素の働きを知覚・感受することが難しいため、自主教材を使用した。比較鑑賞をさせるために2種類の教材を作製した。生徒の実態に即して、それぞれのリズムの違いを知覚し、それらが生み出す特質や雰囲気を感じ取れるように検討を重ねながら作った。実際、生徒たちはそれぞれのリズムの違いを知覚し、それらが生み出す特質や雰囲気を感じ取ったことをもとにして表現の工夫に取り組む姿がみられ有効であった。今後も生徒の視点に立ち、教材に対するこだわりを強くもって、教材づくりを行っていききたい。

- ・ 楽器の特徴を理解し、基礎的な奏法を生かし、思いや意図をもって表現を工夫したり、鑑賞したりする題材構成について研究する。

生徒に音楽としての学力を身に付けさせるために、新学習指導要領に沿って題材構成を行った。新学習指導要領の内容をきちんとおさえながら、授業時数が限られていることをきちんと認識し、1時間ごとに生徒の変容がみられるような指導計画を立てることが重要である。また、生徒に指導することと学びとらせることの住み分けを見極めることも重要である。生徒が音や音楽に直接働きかける場面を多く設定し、生徒が思いや意図をもって表現を工夫したり、鑑賞したりすることができるように学習内容を整理することも重要である。この点については今後の課題である。

- ・ リズムやコードネーム等を理解し、楽譜に関するリテラシーを身に付けさせるための学習の手立てについて研究する。

楽譜に関するリテラシーを身に付けさせるためのスモールステップとして音符カードと音符見え消しシールを活用した。これはリトミックからヒントを得て、音符を隠す(消す)ことによって、休符あるいは音の伸ばしを表し、隠す(消す)位置を変えることによって様々なリズムを感じたり、つくったりすることが可能になると考えた。この音符カードと音符見え消しシールを活用し、リズムの工夫の視覚化を図ることによって、指導者が生徒の学習の様子をきちんと把握したり、他のグループの生徒たちに工夫を伝えたりすることができ有効であった。このように生徒の視点(主に音楽が苦手である生徒)に立って、音楽の学習に意欲的に取り組むことができるよ

うな手立てを豊富に取り入れることが学習効果を上げることにつながり、指導のねらいを達成しやすくなると考える。創作の授業において楽譜に関するリテラシーは欠かせなくなると考える。平成24年度の新学習指導要領の完全実施を見据えて今後様々な手立てについて考えていく必要がある。

## 9. 授業実践例 (平成21年7月4日 中等教育研究会より)

### 1. 題材名 旋律にふさわしい伴奏を工夫して演奏しよう (4時間扱い)

#### 2. 題材について

##### (1) 本題材と新学習指導要領との関連

本題材は、新学習指導要領の第2学年の内容

「A表現」(2) 器楽 ア「曲想を味わい、曲にふさわしい表現を工夫して演奏すること。」

イ「楽器の特徴を理解し、基礎的な奏法を生かして演奏すること。」

「B鑑賞」(1) ア「音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。」

〔共通事項〕リズム、旋律、テクスチャ、を指導する題材である。

##### (2) 題材設定の背景

中央教育審議会答申において学習指導要領の改訂について示されたポイントの中に、「感性を高め、思考・判断し表現する一連の学習過程を重視する」とある。これは、授業を通して生徒一人一人が音楽のよさや美しさなどを感じ取り、それを基にイメージや意図をもち、歌唱などによって表現する活動の過程に、音楽の学力をはぐくむ重要な学習があることを意味している。このような観点で題材を構成し、指導を展開することが求められていると言えよう。

そこで、2年生の生徒は、入学してきてからこれまでの間、音楽を形づくっている要素の働きを知覚・感受する学習を通して、音楽を形づくっている要素の働きによって音楽が豊かに表現されることを学習してきた。そして、音楽を形づくっている要素が楽曲のイメージや作曲者の意図とかかかわっていることも学習した。さらにそこで感じ取った要素を歌唱活動の中で確認し、自分たちのイメージをもって歌唱表現に取り組んだ。この一連の学習を終えた生徒たちの感想には、「工夫したことをいざ発表するとなると難しかった」、「自分たちで工夫することは楽しかった」、「他のグループのアイディアが素晴らしかった」などの記述が見られた。これは、生徒たちが試行錯誤しながら音楽のよさや楽しさを実感できたことを表しているといえる。このような学習を積み重ねていくうちに、生徒たちのさらに音楽への関心・意欲が高まり、音楽の表現や鑑賞の能力がはぐくまれていくものと考えられる。

##### (3) 本題材の特色

本題材では、鍵盤楽器の特徴に着目し、旋律に合った和音を様々に工夫して演奏することにより、音楽表現に広がりや生まれることに気付かせたい。生徒たちが慣れ親しんでいるJポップやロックなどの音楽は、和音の進行が旋律のよさを引き出している。生徒たちにも和音の働きを理解して、自分たちのイメージに合った表現ができるようになれば、より音楽の良さや楽しさを実感できるであろう。そこで聴く活動を通して、旋律と和音がかかり合って生み出される豊かな表現に気付き、伴奏を工夫する学習を行い、鍵盤楽器による表現の楽しさを感じさせたい。そのために、旋律と和音の働きを知覚・感受することのできる鑑賞教材を用いて、楽曲において和音の働きが旋律のよさを引き出し、楽曲のイメージとかかかわり合っていることを感受させる。その感受したことを基にして、「主人は冷たい土の中に」を、自分たちの演奏したいイメージを膨らませながらグループで表現を工夫する。表現を工夫することを通して、旋律と和音とのかかわり合いなどの働きによって、豊かな音楽表現が生み出されることを感じ取らせたい。さらに、学習のまとめとして、鑑賞活動を行い、音楽の構造と曲想とのかかわりを理解し、味わって聴くことができるようにしたい。

### 3. 全体研究、教科テーマとのかかわり

音楽科では楽曲の構造に着目し、さまざまな音楽を形づくっている要素の働きを知覚し、それらが生み出す特質や雰囲気を感じ、それを基にして表現の技能や鑑賞の能力が高められるような題材の構想を行っている。こ

れは、感受を基盤とした領域相互の関連性を考慮した題材構成によって、効果的に音楽の学力を身に付けることができるからである。

そこで1年生から3年生までの3年間を見通した中で、段階を踏みながら音楽のよさや美しさを深くとらえることができるようにしたい。

そのために、音楽科では、表現領域と鑑賞領域の関連した授業を行う中で生徒が感受を基盤として「かかわり」を意識し、見いだすことができる題材について研究を進めていきたいと考える。

また、昨年度から国立教育政策研究所の「学力の把握に関する研究指定校事業」の3年間（H20年度～22年度）の研究指定校を受け、学習指導要領の目標等の実現状況を把握し、目標に準拠した評価の在り方について実践的な研究を推進していく。

#### 4. 題材の目標

- ・旋律と和音やリズムなどのかかわりを意識し、和音やリズムを工夫して音楽を表現することの楽しさを感じ取り、器楽表現及び鑑賞をする。

#### 5. 教材について

##### (1) 教材名

<器楽教材>

「主人は冷たい土の中に」フォスター作曲

<主な鑑賞教材>

「故郷の人々」フォスター作曲（自主製作教材）

「トルコ行進曲（ピアノソナタ第11番イ長調）K. 331より第3楽章」モーツァルト作曲（抜粋）

##### (2) 教材選択の理由

器楽教材は、既習曲で親しみのもてるものであり、ハ長調、2部形式（aa' ba'）で表現の工夫に取り組みやすいものを選択した。

鑑賞教材は、まず、「故郷の人々」について、次の(A)～(C)のパターンによる演奏を比較しながら聴き、様々な要素の働きによって音楽の表情が多様に変化することを理解させたい。

(A) は、旋律に主要三和音をつけて演奏したもの

(B) は、旋律に4分音符をベースにして低音と和音を工夫した伴奏をつけて演奏したもの

(C) は、旋律に8分音符をベースにして低音と和音を工夫した伴奏をつけて演奏したもの

そして、この題材のまとめとして「トルコ行進曲（ピアノソナタ第11番イ長調）K. 331より第3楽章」を聴き、旋律と伴奏（和音、リズムの工夫）とのかかわりが生み出す音楽の表情が変化していくことに気付かせたい。

#### 6. 題材の評価規準及び学習活動における具体的評価規準

	ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽的な感受や表現の工夫	ウ 表現の技能	エ 鑑賞の能力
題材の評価規準	旋律と和音、リズムの働きや曲想、鍵盤楽器の基礎的な奏法に関心を持ち、意欲的に器楽表現や鑑賞をしている。	旋律と和音、リズムを知覚し、それらの働きを感受して、イメージを膨らませながら表現を工夫している。	低音と三和音のリズムを工夫し、自分たちのイメージとかかわらせながら、鍵盤楽器の基礎的な奏法を生かして表現する技能を身に付けている。	旋律と和音、リズムとのかかわりなどが生み出す曲想を味わって、楽曲を聴き取っている。
具体的評価規準	①旋律と和音、リズムなどの働きが生み出す曲想や鍵盤楽器の基礎的な奏法に関	①旋律と和音、リズムなどを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ	①低音と三和音のリズムを工夫し、自分たちのイメージとかかわらせながら、鍵盤	①旋律と和音、リズムとのかかわりなどが生み出す曲想を味わって、楽曲を聴き

	心をもち、意欲的に器楽表現をしている。 【観察】 ②旋律と和音、リズムとのかかわりに関心をもち、意欲的に鑑賞している。【観察、学習シート】	受している。 【学習シート、観察】 ②旋律と和音、リズムとのかかわりを感じ取って、器楽表現を工夫している。【観察、演奏】	楽器の基礎的な奏法を生かして表現する技能を身に付けている。【演奏】	取っている。 【観察、学習シート】
--	-----------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------	-----------------------------------	----------------------

## 7. 題材の指導と評価の計画

ねらい	時	学習活動	具体的評価規準	☆Aと判断する生徒の状況例	備考
				■Cと判断される状況への働きかけ	
鍵盤楽器の特徴を理解する。  「故郷の人々」を聴いて、和音やリズムなどの働きによる表現効果を聴き取る。	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鍵盤楽器の主な特徴を理解する。(一人で旋律や副次的な旋律、伴奏などを同時に演奏することができる。)</li> <li>・旋律と和音やリズムとのかかわりが聴き取りやすい楽曲を聴き、それらによる表現効果を感じ取る。</li> <li>・聴き取った要素の働きを「主人は冷たい土の中に」の表現にどのように生かしたいか考える。</li> </ul>	イ① 旋律と和音、リズムなどを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取っている。 【学習シート、観察】	☆学習シートにすべての表現の工夫(和音やリズム)を聴き取ったことを記述している。 ■一つも記入していない生徒に近くでヒントを出しながら聴かせる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ハーモニーキーボード</li> <li>・FD</li> <li>・学習シート</li> <li>・楽譜(拡大コピー)</li> </ul>
グループごとに和音やリズムなどと自分たちのイメージとかかわらせながら伴奏を工夫する。	2 本時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「故郷の人々」で聴き取ったリズムの構造について理解する。</li> <li>・グループごとに伴奏を工夫して「主人は冷たい土の中に」を演奏する。</li> </ul>	ア① 旋律と和音、リズムなどの働きが生み出す曲想や鍵盤楽器の基礎的な奏法に関心を持ち、意欲的に器楽表現をしている。 【観察】 イ② 旋律と和音、リズムとのかかわりを感じ取って、器楽表現を工夫している。【観察、演奏】	☆これまでに学習したこと(旋律と和音やリズムなどのかかわり)を生かしたり、音楽的な語彙を使ったりしながら器楽表現の工夫に取り組んでいる。 ■器楽表現で不安な部分を指導する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ハーモニーキーボード</li> <li>・FD</li> <li>・学習シート</li> <li>・アイディアスケッチ用ボード(ミニホワイトボード、音符カード、マグネット)</li> </ul>

グループごとに発表を行う。	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループごとに発表を行う。</li> <li>互いの表現の工夫を聴き取る。</li> </ul>	イ② 旋律と和音、リズムとのかかわりを感じ取って、器楽表現を工夫している。 <b>【観察、演奏】</b>	☆低音担当と和音担当とでお互いに聴き合いながら発表を行っている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>ハーモニーキーボード</li> <li>学習シート</li> </ul>
			ウ①低音と三和音のリズムを工夫し、自分たちのイメージとかかわらせながら、鍵盤楽器の基礎的な奏法を生かして表現する技能を身に付けている。 <b>【演奏】</b>	■生徒の横で器楽指導を行う。	
「トルコ行進曲（ピアノソナタ第11番イ長調）K. 331より第3楽章」を聴いて、旋律と和音やリズムなどのかかわりによる表現効果を味わって聴く。	4	これまでに学習した旋律と和音、リズムなどの働きによる表現効果を味わって聴く。	ア② 旋律と和音、リズムとのかかわりに関心をもち、意欲的に鑑賞している。 <b>【観察、学習シート】</b>	☆学習シートに鑑賞曲は、音楽のイメージと音楽の構造がかかわり合うことによって表現が深まることを記述している。	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習シート</li> </ul>
			エ① ①旋律と和音、リズムとのかかわりなどが生み出す曲想を味わって、楽曲を聴き取っている。 <b>【観察、学習シート】</b>	■聴くポイント（表現の効果に気付きやすい部分）を示して聴かせる。	

8. 本時の授業（4時間扱いの第2時）

(1) 日時 平成21年7月4日（土曜日）9:40～10:30

(2) 場所 山梨大学教育人間科学部 赤レンガ館内

(3) ねらい グループごとに和音やリズムなどと自分たちのイメージとかかわらせながら伴奏づくりを行う。

(4) 学習の展開

\*教師の指導 ◇学習活動

時間	学習のねらい	学習活動及び教師の指導	評価・備考
9:40 (3分)	1. 学習課題を知る。 「旋律にふさわしい伴奏の工夫をしよう」	前時の学習を振り返り、再び和音・リズム・旋律の働きを知覚・感受する。	
9:43 (22分)	2. 「故郷の人々」のBバージョン及びCバージョンを聴き、どんな構造（旋律・和音・リズム）になっていたのか復習する。 ・旋律の反復 ・音楽の盛り上がり の部分と和音をもとにしてリズムを工夫することによって	◇前時に学習シート（楽譜）に書き込んだことをもとにもう一度音源を聴き、確かめる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>FD</li> <li>ハーモニーキーボード</li> <li>学習シート</li> </ul>



<p>10:05(20分)</p>	<p>さらに音楽の表現が豊かになることを理解する。</p> <p>3. グループに分かれて「主人は冷たい土の中に」を自分たちのイメージに合った表現ができるように互いに聴き合いながら練習する。</p> <p>・グループで1番を通して演奏し、自分たちのイメージに合った表現になっているかどうか確認しながら練習する。</p> <p>4. いくつかのグループの表現の工夫を聴き合う。・音楽の構造を意識して表現の工夫がなされているかどうか聴き取る。</p>	<p>◇自分たちのイメージに合った伴奏の工夫ができるように互いに聴き合いながら練習する。</p> <p>*「故郷の人々」のBバージョン及びCバージョンで聴き取った音楽の構造（旋律・和音・リズム）を手掛かりにして試行錯誤できるようにする。</p> <p>*各グループを巡視しながら、イメージに合った表現ができるように技術指導を行う。</p> <p>*各グループの工夫を認め、全体に広げる。</p> <p>*1番を通して演奏できるようになったグループのところへ行き、アドバイス・評価を行う。</p> <p>*音楽の構造（旋律・和音・リズム）を手掛かりにして工夫を行っているところを認め、全体に広げる。</p>	<p>・ハーモニーキーボード ・アイディアスケッチ用ボード（・ミニホワイトボード・音符カード・マグネット）</p> <p>ア① 旋律と和音，リズムなどの働きが生み出す曲想や鍵盤楽器の演奏に関心をもち，意欲的に器楽表現をしている。</p> <p>【観察】</p> <p>イ② 旋律と和音，リズムとのかかわりを感じ取って，器楽表現を工夫している。【観察】</p>
<p>10:25(5分)</p>	<p>まとめ・次回の予定を知る。考えた低音と和音のリズムのアイディアスケッチをする。</p>	<p>◇本時で取り組んだ表現の工夫をすべてのグループが次回仲間の前で発表することを知らせる。</p>	

## 9. 研究協議

### (1) 質疑応答

A: 「主人は冷たい土の中に」を教材として使った意図は何か。

授業者: 既習曲で親しみやすいから。また、2部形式で生徒が工夫しやすいから。

B: 鍵盤楽器曲は何を聴かせたのか。

授業者: バッハの「フーガト短調」パイプオルガンの曲を聴かせた。

B: Aバージョンとはどういうものだったのか。

授業者: 旋律と、全音符で主要3和音を演奏したものである。

C: 今日使った鍵盤楽器には生徒はどれくらい取り組んでいたのか。

授業者: この題材が初めてである。

A: 個人差が大きく低音と和音の区別がおさえられていなかったと思う。先生が思っていた完成度はどれくらいなのか。



授業者：おさえが足りなかったと反省している。個人差が大きく難しいが、指遣いなどは細かく言わないで演奏できたという楽しさを味わわせたい。1, 2段目まで演奏できればよいと思っている。

D：練習から入ったが、前時の聴き取りがどうだったのか。B, Cについてはどれくらい聴きとれたのか。

授業者：今日は2回目ではあるが、前時は聴いて感じをつかんだだけ。リズムのことは今日が初めて。

(2) 討議 リズムの工夫をする為に音符をかくすというカードを取り入れた学習は、ねらいの達成に役立ったか。

B：有効であったと思う。かくされた音符がのばされているのか休符なのかは難しいが、持ち帰って授業に取り入れてみたい。男女でリズムをたたいたが、どちらかをひざ打ちなどにして変えれば低音との区別がわかりやすかったのではないかな。鍵盤楽器の音色を変えることは難しいか。

A：発表させた時に、リズムをたたくなど教師の手だてが必要だったのではないかな。

E：旋律にふさわしいとかどんな表現をといるねらいが、リズムの組み合わせにずれてしまったのではないかな。次の時間にどういうふうにもっていくのか。表現意図が不十分だったのではないかな。

授業者：イメージから始めたが、やりながら変わっていく生徒もいたと思う。次の時間には、イメージが伝わったか深めていくことを考えていく予定。自分でも迷っているところがあるので、色々意見を聞きたい。

F：「のどかな故郷。働き盛りの故郷。」と言った時に、なぜそう伝わるのか全体に確認があればよかったのではないかな。見ていた男子生徒たちは、「優しい感じにしたいから八分音符はいらないな。タタタにしよう。」とイメージに近づけたいとがんばっていた。カードの使い方をもっとわかるようにしておくとうよかった。「バランスがだいじ。」と言ったが、生徒はわかったか。

G：教師の意図ではない作品が出てきたらどうするのか。

授業者：低音の1拍目を入れることをおさえ忘れた。1, 2年生では、細かいことを手順よく教えることが必要。「わからない人はおいで。」と言ったが集まらないのでそのまま進めた。八分音符は元気な感じ、四分音符は静かな感じといったことをもっと全体で確認しておけばよかった。

H：小学校の学習内容をしっかりしておくことの大切さを感じた。中学ではその次のことをできるようにさせたい。リズムの操作のおもしろさと指導案の表現意図がずれていた。音楽の要素をつかうことで小学校ではおもしろさを、中学ではすばらしさを伝えたい。そうして義務教育9年間を終わらせたい。

### (3) 指導・助言

橘田美喜恵 山梨県教育センター研修主事

- ・器楽の授業は正確に演奏できればよしとしていたが、今回の授業提案は新しい試みであった。難しさが多かったが、生徒によって個人差が大きい。「Bだけ。」「Cだけ。」「右手パートだけ。」「できたら左手パートも。」そして「どういうリズムでどんなイメージにしていきたいか。」などというふうに、生徒の実態に応じてアレンジして考えられる提案であった。
- ・どういう意図で工夫をするのか明確にするとよかった。

葉袋貴 山梨県教育委員会指導主事

- ・本県では歌唱においては望ましい授業の方向性が出てきているが、器楽の授業においては再生して終わるところを打破していきたい。そういう意図の授業であった。
- ・歌唱、器楽、創作という発展的研究の中で、キーボードの演奏を中心に考えてみた。また、「リトミック」の発想を取り入れ、体感しながら伴奏の工夫を、意図を持ってするという授業を考えてみた。今後の楽譜リテラシーや創作につなげていき、様々な展開ができるのではないかな。
- ・うまくいかなかった理由としては、旋律や伴奏などの音色を変えたり、Bバージョンをもっと遅くしたりしてCとの違いを出すなどの工夫が必要であった。また、「速くするとつらいよね。」と言ったが、速くてもできるように口で言わせるなどしてその良さを感じさせるべき。「バランスがだいじ。」は乱暴な言い方。「低音パートには1拍目がだいじ。」と言うべきであった。教師が話すほどに生徒との間に距離ができた。生徒に何をおさえたいのかが弱かった。「～の故郷」のところで、こうしたからそのように聞こえるというところがおさえられなかったから。そうすれば、ペアになってからもっと意欲的に取り組めたのではないかな。生徒の力を加味しながら工夫できた案である。前半の教師の働きかけや手だてをもっと考える必要があった。授業は生き物である。

教師の生徒に伝えたいという熱い想いを最後まで生徒の立場になって時間をかけて授業に臨むことが大切だ。

手塚実 山梨大学教授

- ・演奏を聴いて「あんなふうな音をだせるようになりたい。」「あんな演奏をしてみたい。」と思った人たちが音楽好きになっている。理屈ではなく、演奏が動機であった。そこに、音楽学と音楽教育の難しさがあるのだろう。
- ・本来小学校でやるべきことをしっかりできるようにしたい。中学校の音楽教育で目指したいことが達成できるように、日本中できちんと行われるようになるとよい。
- ・大きくものを見るということも必要。そういう提案がされた今回の授業を評価したい。

大熊信彦調査官 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 教育課程調査官  
(併任) 初等中等教育局教育課程教科調査官

- ・(調査官自ら持参して配布した資料を説明しながら) ある高校の授業では、波線ばかりで思いが少ない。そこが大切だと思うのだが。また、先日の中学校の授業で、思いを伝える為にフェルマータや強弱の工夫をするというものがあつた。昨年の成田先生の授業の応用だと思われる。
- ・音楽は、音楽の要素はたくさんあるが、どこかを窓口にして捉えていくことが大切。資料の10ページの表は授業者が大切にしておくべきこと。
- ・要素が少なくても、音楽的に豊かでないというわけではない。指導案については、いくつか直す点があるので、また検討していきたい。
- ・指導案には学習感想を書かせるもあり、今日は書かせなかったが、それでよかったと思う。アイディアスケッチを書かせる方がよい。
- ・「イメージに合った・・・」の考え方が、たとえわらべうたであっても、比喩的には表せない。これから音楽がどうなっていくのかが大切。音楽よりも比喩的なセンテンスが先行することは、ある意味危険。どんなイメージかということはこれからつくる音楽のきっかけになればよい。音楽より言葉がひとり歩きし過ぎてしまうと、本来の意味をなさない。音楽はあくまでも音あつてのものだと思う。そして音のイメージは音の質感で起きているのである。
- ・指導計画にある最後の「Let it be」は、検討するべき。たとえばシューベルトとショパンとベートーヴェンを比べて自分で1曲選んで紹介文を書く学習など。鑑賞と器楽の学習についてこれから研究をするとよい。

## 〈引用文献〉

- ・中学校学習指導要領解説音楽編 文部科学省

## 〈参考文献〉

- ・中学校音楽科の指導と評価 西園 芳信 監修 暁教育図書
- ・新しい音楽科の指導と評価 川池 聰 著 教育芸術社
- ・音楽科では何を指導しているのか  
～小, 中学校9年間を見通した音楽科教育 シリーズ1 音楽鑑賞教育振興会研究開発部会編
- ・音楽科の「学び」を浮き彫りにした指導と評価の計画とは  
～小, 中学校9年間を見通した音楽科教育 シリーズ2 音楽鑑賞教育振興会研究開発部会編